

性行動・コミュニケーション)についての4項目とした。

### 3)分析方法

分析は、インタビューガイドと録音記録から逐語記録を作成し整理した。作成した逐語記録は繰り返し読み込み熟読した後、1つの意味を表していることを基準に文脈を切り、インタビュー内容に沿って「今の生活」、「今の生活に対する受け止め」、「現在の体調」、「思春期に起こしやすい行動や特徴(喫煙・飲酒・性行動・コミュニケーション)」別に、文章を抽出した。抽出した項目について、意味の類似性、相違性に基づいてカテゴリー化し、各々のカテゴリーに名称を付けた。実際の分析にあたっては、質的研究者に適宜アドバイスを受けた。

### 4)倫理的配慮

フリースクール内のミーティングで調査主旨の説明と、調査対象者に対する電子メールのやり取りを通じて研究目的の説明と同意を得た。インタビュー前に再度、研究目的と内容の秘密保持、目的以外の利用はしないこと、インタビュー中の協力の拒否権があること、また記録内容は研究終了後消去することを説明し同意を得た。

### 5)信頼性・妥当性を高めるための努力

信頼性・妥当性においては、インタビュー終了後にインタビューガイドに記録した内容を対象者自身に見てもらい発言の内容が合っているか確認を取った。また、対象者から得られたデータと調査者の理解に矛盾がないか検討した。

## C. 研究結果

調査に協力が得られたのは15歳から20歳までの男女15名(男6名、女9名)であった(表1)。

表1. 対象者の属性

No.	性別	年齢	不登校 開始年齢	フリースクール 入校年齢	フリースクール 在籍年数
1	男	15	8歳～	13歳	2年
2	男	16	7歳～	13歳	3.5年
3	男	16	11歳～	14歳	2年
4	男	17	13歳～	14歳	3年
5	男	18	10歳～	14歳	4年
6	男	19	14歳～	16歳	3年
7	女	15	13歳～	13歳	2年
8	女	15	8歳～	13歳	2年
9	女	16	13歳～	13歳	3年
10	女	16	13歳～	13歳	3年
11	女	16	7歳～	11歳	5年
12	女	17	14歳～	17歳	0.8年
13	女	17	10歳～	14歳	3年
14	女	18	18歳～	18歳	0.8年
15	女	20	14歳～	18歳	2年

なお以下の結果についての表記は、カテゴリーは【 】で、発言の要約はで《 》示すとし、対象者の記述は原文のまま「 」で示す。

### (1)「今の生活」

対象者の「今の生活」の観点で分析した結果【自ら決める生活】と【流される生活】の2つのカテゴリーを抽出した(表2)。

表2. 「今の生活」で、抽出されたカテゴリーと発言の要約

カテゴリー	発言の要約
自ら決める生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の予定は自分で決める</li> <li>・予定で決める起床、就寝時刻</li> <li>・通うことで出来た生活リズム</li> <li>・夜は自分だけの時間</li> <li>・好きなことには時間をかける</li> </ul>
流される生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行き当たりばったりの予定</li> <li>・目的のない夜更かし</li> <li>・兄弟、家族との生活時間のズレで弧食</li> <li>・起床時間が遅く朝食の欠食</li> <li>・曜日感覚の喪失</li> </ul>

### 【自ら決める生活】

フリースクールでは学校のような同一授業はないため、対象者は《自分の予定は自分で決める》など好きな講座を選び時間割を組んでいた。そのため各自で組んだ時間割に沿った生活を送っており、対象者の生活は個人差が大きかった。

「フリースクールに行く日によって違う生活です。まあ、寝る時間によって起きる時間も決める感じですね」

### 【流される生活】

対象者にとって、自主性に任された時間割は一方で楽な生活に流されてしまうことがある。特に昼夜逆転のため《家族との生活時間のズレから孤食》や《起床時間が遅く朝食の欠食》がみられた。

「寝るのも遅いから典型的な夜型。朝起きないから朝食は昼と一緒に。ご飯は一人で食べる。だって私が起きる頃はもうみんな出掛けているし」

### (2)「今の生活に対する受け止め」

対象者が「今の生活」をどのように受け止めているかという観点から分析した結果、【容認】、【葛藤】、【あきらめ】という3つのカテゴリーを抽出した(表3)。

表3.「今の生活に対する受け止め」で抽出されたカテゴリーと発言の要約

カテゴリー	発言の要約
容認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分は自分の時間軸がある</li> <li>・人それぞれの生活スタイルがある</li> <li>・良くはないと自覚しているが今はいい</li> <li>・無理をしない生活がしたい</li> <li>・このペースを守りたい</li> </ul>
葛藤	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自覚しているリズムの崩れ</li> <li>・今の生活が楽だとは思わない</li> <li>・どうしていいのかわからない</li> </ul>
あきらめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・変えたいけれど出来ないあきらめ</li> <li>・コントロール出来なくなった生活</li> </ul>

### 【容認】

対象者は、今の生活に対し、《自分は自分の時間軸がある》や《人それぞれの生活スタイルがある》ため他人から干渉されない、また自分も干渉しないスタイルを保持したいと発言していた。自分の生活スタイルを認めているまた、自分なりのカリキュラムを遂行し自分のペースで行きたいという気持ちが含まれていた。

「自分の生活スタイルが4時に寝て、昼2時に起きると傍から見ると乱れていると思われるかもしれない。でも、昼間やることなく、夜静かなときに何かしたいと思う人もいるし、そうしたら、そのスタイルに合わせた方が良く思う」

### 【葛藤】

しかし、自ら作る生活が自分の意思に反して流される生活になってしまう対象者は、今の生活に対して《どうしていいのかわからない》などの不安

や葛藤を持っていた。

「今の生活が楽だとは思わない。強制されていたことの方が自分は良いのではないかと思う。何も決まっていなくて余計大変かも。どうしていいかわからなくなる。来る時間も自由だし、自分にはある程度決まった時間割があった方が楽かもと思うようになった」

### 【あきらめ】

また今の生活に対し、《変えたいけど出来ないあきらめ》や《コントロール出来なくなった生活》などあきらめの気持ちが出てきたことを語っている者もみられた。

「今の生活は変えたいと思うけど。でもやろうと思った次の日やれない。もうあきらめる。出来ないって思う」

### (3)「現在の体調」

対象者の現在の体調から、【気にとめない健康】と【健康を意識する機会の欠如】の2つのカテゴリーを抽出した(表4)。

表4.「現在の体調」で抽出されたカテゴリーと発言の要約

カテゴリー	発言の要約
気にとめない健康	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体調は「元気」なので気にしない</li> <li>・言われて気付く体調の変化</li> <li>・よく寝てるから健康的</li> </ul>
健康を意識する機会の欠如	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康がどうかわからない</li> <li>・身体計測とか受けていない</li> <li>・視力は気になる</li> </ul>

### 【気にとめない健康】

対象者の体調についての自覚は、「元気」であり特に問題はないという発言が多く聞かれた。特に、フリースクールに通うことで睡眠時間が多く取れ、健康的であると発言する者もいた。

### (4)「思春期に起こしやすい行動や特徴」

対象者の発言から【タバコは吸わない】、【酒は外で飲まずに家で飲む】、【異性より友人が大切】、【ボディイメージには敏感】、【さらけ出さない内面】、【会話のないコミュニケーション】の6つのカテゴリーを抽出した(表5)。

「元気なんで身体のこととかって気にしないですよ。学校に行っている頃は睡眠不足でしたけど今

は夜遅く寝ても昼過ぎに起きるので睡眠時間は取れていますしね。だから健康的ですよ」

【健康を意識する機会の欠如】

フリースクールは、学校で行う健康診断や身体計測がないため、疾病の有無や正常に発育しているか確認することが出来ない。現在の健康状態に対する評価が受けられないという発言がみられ

た。

「自分の身体ってあんまり考えたことがない。でも身長とかは測ってみたい。もう何年も測ってないし。学校であった身体計測とか受けたい。体重計は何処にでもあるんで最近測ったけど身長計ってないし。僕はずっと引きこもっていたから多分その間に身長とか伸びる時期だったんだよね。もう伸びないかもしれない

表5.「思春期に起こしやすい行動や特徴」で、抽出されたカテゴリーと発言の要約

カテゴリー	発言の要約
タバコは吸わない	・周りに吸っている人がいない ・なんとなく身体に悪いタバコのイメージ ・身近にタバコで健康を害した人がいる
酒は外で飲まずに家で飲む	・飲みに誘ってくれる人がいない ・家族の飲酒に付き合う ・口当たりの良い酒類を好む ・飲酒に対する興味はある
異性より友人が大切	・恋人より友人が欲しい ・今の仲間が大切 ・性交には興味がない
ボディイメージには敏感	・ダイエットは興味がある ・身長を伸ばしたい
さらけださない内面	・親には話さない ・友達でも相手を知っていないと話さない
会話のないコミュニケーション	・インターネットを利用 ・話すよりメールが簡単 ・友達に聞くよりネットで検索

【タバコは吸わない】と【酒は外で飲まずに家で飲む】

喫煙と飲酒について、対象者は全員喫煙経験がなく、飲酒経験はあっても居酒屋等の外で仲間と飲酒する発言はなかった。

「タバコは吸ったことがないです。周りも吸ってないし。今ここ(フリースクール内)に吸っている人は居ないんじゃないかな」「ここは、年齢が低いから飲みに行く人も居ません。誘う人も居ないし。飲みに行くといっても行く機会がないですよ。下の子ばかりで」

【異性より友人が大切】

対象者の異性関係は、特定の異性が居る

者は 2 名であり《恋人より友人が欲しい》、《今の仲間を大切にしたい》など、異性より友人を作りたいと希望する発言が多く、性交についても特定の異性がいなかったため興味がないとする発言がみられた。

「彼女はいません。今欲しい気もないです。なぜと聞かれても困るけれど今は欲しいとは思わない。だからセックスも興味ないし関係ない。今は仲間と居る方が楽しいし、仲間を大切にしたい」

【ボディイメージには敏感】

女性対象者からは、痩せたいなど《ダイエットについて興味がある》という発言があり、男性

対象者からは、「身長を伸ばしたい」など、男女とも思春期特有のボディイメージに対する発言が聞かれた。

「今、ダイエットとか凄く敏感。やってみたいと思う。だから無料のサプリとか一杯申し込んでやって怒られて、テレビとか雑誌とかほんとよく見ますね」

#### 【さらけださない内面】と【会話のないコミュニケーション】

対象者の対人関係とコミュニケーション手段は特徴があり、メールやインターネットを利用し相手の顔を見ない・声を聞かないという会話のないコミュニケーション手段が取られていた。

「親なんかには、話せませんよ。日頃から話していないのに急に話せる訳ないじゃないですか。悩みとかって、相手をよっぽど知らないと話せないです。警戒します。何も知らないでは話せません」

「ネットは調べたいときに直ぐに調べられる。友達に聞くより早いでしょ」「電話で話すより、メールする方が多いかな。その方が簡単な気がする」

#### D. 考察

##### 1. 生活の特徴

「今の生活」と「生活に対する受け止め」から対象者の生活の特徴は、自分で時間割を組み予定を決めるという自由な生活がある一方で、楽な生活に流れてしまうと元に戻りにくいという2つの生活があることが分かった。生活に対する受け止めも、今の生活を容認している者から、不安や葛藤、元の生活に戻せずあきらめの気持ちを抱いている者もあり、自らの生活に対して揺れている心境があることが伺えた。フリースクールは、学校生活のように一斉に決

まった時間で行動することがないため、規則的なパターンに戻すきっかけがなく生活習慣の確立が難しい。また本調査から遅い起床やそれによる家族との生活時間のズレで孤食となり、朝食の欠食につながっていたことも明らかとなった。このことから適宜、今の生活に対する不安や悩みを相談出来る環境や、生活習慣の確立の意義を指導する場が必要ではないかと考えられる。

##### 2. 健康に対する特徴

対象者の身体に対する関心は低く、体調を表す、元気なので気にしないという表現は、健康を「元気」という主観的な感覚でしか表現出来ない現状があった。思春期である対象者は、疾病の発生率が他の年代に比べて極めて低い健康な年代であり、自らの健康について意識しにくいと言える<sup>3)</sup>。しかし、一般の児童・生徒と違い、自らの健康を意識する機会となる健康診断や身体計測を受けられないことは健康に関する意識を低下させる原因になっていると思われる。調査対象としたフリースクールは、6歳から20歳までの在籍生がおり、人間の成長発達が一番著しくみられる時期をフリースクールで過ごしている。そのため、学校に在籍している児童・生徒と同様な健康面の援助が必要であると言える。

##### 3. 思春期の特徴

思春期の特徴を整理すると、対象者は思春期に起こしやすい喫煙・飲酒・性行動が外向的ではなかった。対象者は15歳から20歳であり、一般的には異性に関心が芽生える時期である。思春期に陥りやすい危険行動もこの時期の特徴として見られ、周囲の仲間の誘いや刺激に流されやすいことから起きると言われて

いる。

しかし、対象者は飲みに誘ってくれる仲間がいないことから、酒は外で飲まずに家で飲むという行動を起こし、喫煙もなんとなく身体に悪いタバコのイメージや、周りに吸っている人がいないという周囲の関係やイメージから危険行動に歯止めがかかっていた。

性行動においても、特定のパートナーがいなかったため興味がなく、今は特定のパートナーより友人が欲しいという発言から、対象者が今必要としているのは心を許せる友人であり友人関係の確立を優先することを望んでいた。しかしその反面、対象者の対人関係は、さらけださない内面や会話のないコミュニケーションがあり、友達でも相手を知っていないと話さないという他者に対する警戒心や自己開示の弱さもみられた。話すよりメールが簡単という現在の若者の特徴もあった。

以上のことから、対象者の思春期の特徴には、人間関係の希薄さや、対人関係の未熟さが大きく影響していることが伺われた。

また、対象者の現在の対人関係には、過去に受けたいじめや不登校時の経験が影響していることも考えられる。このため、対象者への健康教育や指導には現在の状況だけでなく過去の不登校という経験を考慮したうえで行うことが適切な教育や指導方法に繋がると考えられる。

今回の調査からは、はっきりと確認をしていないが対象者は不登校となってから健康教育を受けていないと思われる。そのため、各個人の健康に対する知識に差があると考えられる。特に性教育では、一般の児童・生徒の間においても差が大きく現れる現状があり、対象者の知識・理解度などが懸念される。

今回、調査対象としたフリースクールでは、

在籍性の要望により、スタッフが外部講師を招いて性教育を行う機会もみられていた。しかし、必ずしも在籍生が全員出席する訳ではなく、興味をもった者が参加する形式であった。このため、同一の知識を着けさせることは出来ない状況にあった。このことから、フリースクールに在籍する児童・生徒の健康教育は、集団で行うのではなく、個々の知識レベルを確認してから実施することが大切であると思われる。また、指導を行う側もこの点を考慮し、個々の持っている知識を確認しながら、指導していくことが必要である。

本研究は方法論として、インタビュー調査を元に内容分析をしていくという質的方法を用いたが、今回の分析の反省点として、対象者が語った内容の意味の理解が、その対象者自身の意味するところに妥当するかどうかを対象者に再度確認することができなかった。また、対象者から得られたデータと調査者の理解との間に矛盾がないか検討する機会も少なかった。この点から、妥当性の検討に努力が足りないと思われた。

調査対象の選択を1つのフリースクールにしたことにより、偏りのある結果が出る可能性もあり反省すべき点である。

本研究からすべてのフリースクールの児童・生徒の特徴が明確になった訳ではない。しかし、本調査から得られたカテゴリーは、今後の全体像を示すキーワードが含まれると思われる。本研究の次の課題として、より全体を把握出来る量的調査を行う必要があると考えている。

## E. 結論

対象者の生活の特徴は、自ら決める自由な生活がある一方で、楽な生活に流れてしまう 2

つの生活があり、現在の生活に対して容認、葛藤、あきらめの心境があった。

対象者の健康に対する関心は低く、健康診断や身体計測など健康に対する評価を受けていないことが原因と考えられた。

対象者は思春期に起こしやすい喫煙・飲酒・性行動が外向的ではなく、これには対人関係が大きく影響していることが伺われた。

以上のことから、フリースクールに在籍する児童・生徒に対する健康支援として、学校と同様の健康診断等の健康管理と、生活習慣や個々の背景が異なることから、個々の知識に合わせた細やかな健康教育が必要であると示唆された。

また、急増する不登校児童・生徒に対してフリースクールの需要は高まっており、早急な実態把握と支援方法の検討が望まれた。

#### 謝辞

稿を終えるにあたり、インタビューに応じてくださったフリースクールの在籍生に心よりお礼を申し上げます。また、貴重な研究の場を提供してくださった、フリースクール全てのスタッフの皆様に感謝申し上げます。

#### 付記

本報告は国立保健医療科学院専門課程において、研究協力者鈴木雅子により行われた特別研究を元に、本研究班の研究目的に即して再構成したものである。

#### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省ホームページ: 学校基本調査速報、<http://www.mext.go.jp/>
- 2) 草川三治、登校拒否児の身体要因に関する研究、東京女子医大誌、1988;58;171-174

3) 松本清一、思春期保健学、同文書院、1982;155-157

4) 岩田裕子、村井文江、田代順子他、高校生の健康の気付きに関する質的研究; 思春期学; 1999;17;134-140

5) 野口咲子、工藤美子、思春期女子の健康に対する意識とその行動、思春期学; 1998;16;304-310

6) 野口咲子、工藤美子、思春期女子の健康に対する意識とその行動  
思春期学; 1998;16;304-310

7) 箕輪真澄、平成8年度厚生科学研究費補助金厚生科学特別研究事業「未成年者の飲酒行動に関する実態調査」研究班 1996年度未成年者の飲酒行動に関する全国調査; 1997;12

8) 箕輪真澄、平成8年度厚生科学研究費補助金厚生科学特別研究事業「喫煙の実態に関する実態調査」研究班 1996年度未成年者の喫煙行動に関する全国調査; 1997;12

9) 平井信義、宅磨武俊、稲村博編、登校拒否の経過、有斐閣選書; 1980

10) 渡辺位、登校拒否の病理(発現のメカニズム)とその反応、地域保健、1979;5;25

F 健康危険情報 なし

G 発表

1. 鈴木雅子: フリースクールに在籍する不登校経験者の健康に関する一考察、国立保健医療科学院専門課程平成15年度特別研究報告書、2003.

H 知的所有権 なし

平成15年度

厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)分担研究報告書

思春期の保健対策の強化及び健康教育の推進に関する研究

1. 思春期の健康スクリーニングのあり方に関する研究

(3) 思春期にある生徒と保護者の性とタバコに関する実態調査

分担研究者 大久保一郎 筑波大学社会医学系教授

研究協力者 緒方剛(潮来保健所)、小沼文子(潮来保健所)、小室和代(潮来保健所)、

廣野真奈美(潮来保健所)

研究要旨

若年者のニーズを把握するために、管内の小・中・高等学校の生徒および保護者らに性に対する知識や意識、喫煙経験、タバコの害の理解度、日常生活等についてのアンケートを実施し、関係機関には、思春期保健対策の実施状況を尋ねた。

70%以上の高校生は高校生がセックスをすることに肯定的であり、中学生でも交際相手であればセックスに応じると回答した生徒が10%を超えた。しかし、生徒自身が性感染症や望まない妊娠から身を守るために必要な知識についての正解率は低かった。また、保護者の多くは、性教育は学校と家庭の両方で実施するべきであると考えているが、保護者も生徒同様予防に必要な具体的な知識の正解率は低かった。

また、「タバコは害がある」という認識は90%以上であるが、「肺がん」以外の害はあまり認識されていないことがわかった。さらに、生徒に周囲の喫煙状況を尋ねたところ、「友達や先輩に吸っている人がいる」との回答が中学生では30%、高校生では70%を超え、小学生では70%以上の生徒が「家族に吸う人がいる」と回答しており、多くの未成年者は喫煙者がすぐ近くにいるということがわかった。このことより、未成年者の喫煙防止のためには、単にタバコの害を伝えるのみならず、断る技術を身につける教育や保護者や教員など周りの大人への正しい知識の普及・啓発が不可欠であることが示された。

思春期保健対策には、小学校・中学校・高等学校と系統立てた教育や保護者への啓発必要であり、そのためには、学校・家庭・地域・医療機関のネットワークの確立と役割分担の明確化が求められる。今後、このアンケート結果を地域に還元していくとともに、このようなネットワークの構築に努めることが重要だと思われる。

A. 研究目的

10代の人工妊娠中絶率の上昇、若年層における性感染症の増加等思春期保健の抱える問題は、近年複雑化している。このような現状において、効果的な対策を実践していくためには、対象者の知識や行動、ライフスタイルなどの観点から情報を収集し、ニーズを正確に把握することが必要である。

また、思春期保健は、学校教育という枠内だけの問題ではなく、学校、地域、医療機関等の関係者の協力体制を築くことが求められている。そのためには、各関係機関が若年者のニーズやお互いの情報を共有し役割を認識することが大切である。

これらのことより、若年者および若年者に関わる機関・関係者についての実態調査を実施した。

B. 研究方法

1) 調査方法

管内の小・中・高等学校の生徒および保護者らに性に対する知識や意識、喫煙経験、タバコの害の理解度、日常生活についてのアンケートを実施した。

調査方法は、生徒・保護者ともに無記名自記式質問紙調査を実施し、生徒に対しては、各学校で30分～1時間の時間を確保してもらい、アンケート中は他の生徒の回答用紙は見ないように生徒に呼びかけた。保護者については、生徒を通して依頼文とアンケート用紙、封等を渡し、協力を依頼した。なお、回収についても同様に、生徒と学校を通して回収した。また、若年者を取り囲む関係機関(病院、学校、教育委員会、保健センターなど)にはアンケート用紙を送付し、思春期保健対策の実態調査を実施した。

2) 倫理的配慮

倫理的配慮として、生徒及び保護者に対して、ア

アンケート実施には、匿名性を保つこと、データは統計処理され個人が特定されることはないことを説明した。また、この調査は強制ではないこと、答えたくない場合答えなくても良いこと、生徒の場合学校の成績や学校での評価に影響することはないことをアンケートと一緒に配布した依頼書に明記した。

なお、アンケート終了後は、対象者自身により封筒にアンケートを入れ提出してもらい、学校関係者は内容を見ないことも説明した。

## C. 研究結果

### 1) 調査標本

保健所管内の協力が得られた高等学校・中学校・小学校の生徒・及び保護者を対象に実施した。

小学生は、4・5・6年生を対象に5校、中学生は1・2年生を対象に3校、高校生は1・2年生を対象に2校、保護者は小・中学校、高校を通して協力して頂き9校であった。

### 2) アンケート結果

#### I 小学生

##### 1 生活調査

##### (1) 家族との会話

家族との会話について尋ねたところ、「よく話をする」と回答した生徒が 84.1%と最も多く、次いで「たまに話をする」14.4%、「ほとんどしない」1.4%、「全くしない」0.1%であった(表1)。

表1 家族との会話(N=922)

	度数	%
よく話をする	775	84.1
たまに話をする	133	14.4
ほとんどしない	13	1.4
全くしない	1	0.1

##### (2) 自己肯定

自分が好きか尋ねたところ、「どちらとも言えない」と回答した生徒が最も多く 34.1%、次いで「どちらかと言えば好き」26.3%、「好き」22.8%が多かった。しかし、「あまり好きではない」11.3%、「嫌い」5.5%と自分を否定的に捉えている生徒も 16.8%と多かった(表2)。

表2 自分が好きか(N=921)

	度数	%
好き	210	22.8
どちらかと言えば好き	242	26.3
どちらとも言えない	314	34.1
あまり好きではない	104	11.3
嫌い	51	5.5

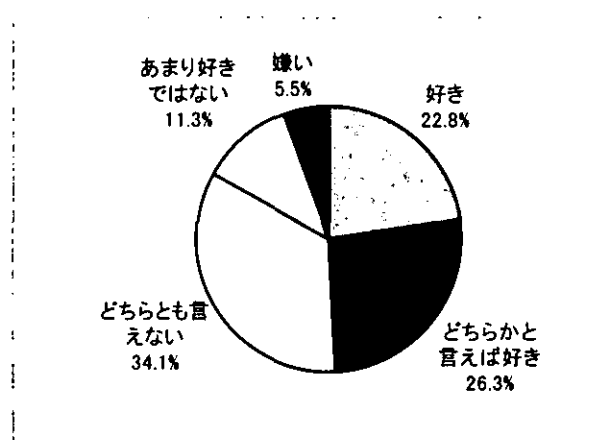


図1 自分が好きか

##### (3) 相談できる友人の有無

なんでも相談できる友人の有無を尋ねたところ、84.1%の生徒が相談できる友人が誰かしらいると回答し、内訳としては「同性の友達はある」と回答した生徒が66.0%と多かった。しかし、「どちらもいない」と回答した生徒も 15.9%と多かった(表3)。

表3 何でも相談できる友達がいるか(N=917)

	度数	%
同性の友達はある	605	66.0
異性の友達はある	48	5.2
同性も異性もいる	118	12.9
どちらもいない	146	15.9

## 2 性に関する調査

### (1) 自分の性の肯定

自分の性について満足か尋ねたところ、「良かったと思う」と回答した生徒が 75.5%と最も多く、次いで「どちらともいえない」17.8%、「反対なら良かったと思う」6.7%と自分の性に満足できていない生徒が 20%を越えた(表4)。

表4 自分の性に満足か(N=922)

	度数	%
良かったと思う	696	75.5
反対なら良かったと思う	62	6.7
どちらともいえない	164	17.8

### (2) 異性の友達の有無

異性の友達の有無を尋ねたところ、「いる」と回答した生徒が 62.7%と最も多く、次いで「いないが、今はほしくない」27.6%、「付き合っている人がいる」5.2%、「異性の友達がいらないのでほしい」4.5%であった(表5)。



表5 異性の友達の有無 (N=920)

	度数	%
いる	577	62.7
つき合っている人がいる	48	5.2
いないので、ほしい	41	4.5
いないが、今はほしくない	254	27.6

(3) 性に関する知識

性に関する知識について尋ねたところ、「心と体の成長には個人差がある」という質問の正解率は、70%台であったが、「心や体の成長には男女差がある」という質問については、60%台であった。また、エイズに関する知識については、10%~30%と低い正解率であった。

3 タバコに関する調査

(1) 喫煙経験の有無

喫煙経験の有無を尋ねたところ、「ある」が 8.1%、「ない」が 91.1%であった。

(2) 周囲の喫煙状況

周囲の喫煙状況を尋ねたところ、「家族に吸う人がいる」との回答が 70%を越え最も多かった。「家族や友人・先輩にタバコを吸う人はいない」と回答した生徒は 27.6%のみであった(表6)。

表6 周囲の喫煙 (N=905)

	度数	%
家族や友達・先輩に吸う人はいない	250	27.6
家族に吸う人がいる	637	70.4
友達や先輩に吸う人がいる	13	1.4
家族と友達や先輩の両方に吸う人がいる	5	0.6

(3) 喫煙の害についての認識および知識

① タバコの害に対する認識

タバコに害があると思うかと尋ねたところ、「害があると思う」と回答した生徒は 87.9%と最も多かった。

② タバコの害についての知識

①で「害があると思う」と回答した生徒にタバコを吸うと害になると思うものを選んでもらったところ(複数回答可)、「肺がん」については 86.9%と高かったものの、「やめられなくなる(依存性がある)」が 70%を越えたほかは、全て 50%以下であった。

③ 受動喫煙の害について

受動喫煙は害があると思うか尋ねたところ、「害がある」と回答した生徒は 80.0%と①で「害がある」との回答よりやや低かった(図2)。

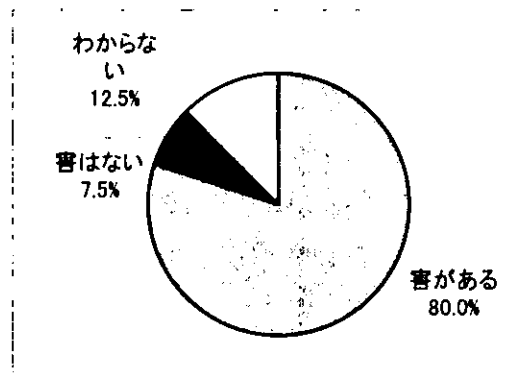


図2 受動喫煙の害の認識

II 中学生

1 日常生活

(1) 家族との会話

家族との会話について尋ねたところ、「よく話をする」と回答した生徒が 68.6%と最も多く、次いで「たまに話をする」26.9%、「ほとんどしない」3.8%、「全くしない」0.7%であった(表7)。

表7 家族との会話 (N=546)

	度数	%
よく話をする	375	68.6
たまに話をする	147	26.9
ほとんどしない	21	3.8
全くしない	4	0.7

(2) 自己肯定

「自分には良いところがあると思うか」と尋ねたところ、「どちらとも言えない」と回答した生徒が 35.5%と最も多く、次いで「どちらかといえばそう思う」20.0%、「そう思う」9.2%、「そう思わない」17.4%、「あまりそう思わない」17.8%であり、35%以上の生徒が自分を否定的に捉えていた(表8)。

表8 自分に良いところがあるか (N=546)

	度数	%
そう思う	50	9.2
どちらかといえばそう思う	112	20.5
どちらとも言えない	192	35.2
あまりそうは思わない	97	17.8
そう思わない	95	17.4

(3) 相談できる友人の有無

なんでも相談できる友人の有無を尋ねたところ、77.0%の生徒が相談できる友人が誰かしらいると回答し、「どちらもない」と回答した生徒は 23.0%であった。内訳としては「同性の友達がいる」と回答した生徒が 62.8%と最も多かった(表9)。

表9 何でも相談できる友達がいるか(N=543)

	度数	%
同性の友達はある	341	62.8
異性の友達はある	12	2.2
同性も異性もある	65	12
どちらもいない	125	23

## 2 性に関する調査

### (1) 自分の性に対する肯定

自分が男または女に生まれたことをどう思っているか尋ねたところ、「良かったと思う」は60%を越える程度であった(表10)。

表10 自分の性に対する肯定(N=542)

	度数	%
良かったと思う	349	64.4
反対ならよかったと思う	32	5.9
どちらとも言えない	161	29.7

### (2) 異性の友達の有無

異性の友達の有無を尋ねたところ、「いる」と回答した生徒が45.5%と最も多く、次いで「いないが、今はほしくない」36.7%、「付き合っている人がいる」8.5%、「異性の友達がいなくてほしい」9.4%であった。

### (3) 性に関する知識

性に関する知識を尋ねたところ、「HIVは、咳・くしゃみで感染」「HIVは、風呂・トイレで感染」などの質問の正解率は50%をこえたが、17項目中10項目は50%以下の正解率であった。

### (4) 交際相手から性交を求められた時の対応

「わからない」が47.6%と最も多く、次いで「絶対性交しない」27.9%、「話し合い、やめる」12.6%、「避妊・性感染症予防を実行することを求め、性交に応じる」5.2%、「たぶん性交に応じる」4.1%、「応じる」2.7%であり、中学生でも10%以上の生徒が性交に応じると回答した。

## 3 タバコに関する調査

表11 家族との会話(N=904)

	度数	%
よく話をする	575	63.6
たまに話をする	262	29.0
ほとんどしない	60	6.6
全くしない	7	0.8

### (1) 喫煙経験の有無

喫煙経験の有無を尋ねたところ、「ある」19.1%、「ない」80.9%であった。

### (2) 周囲の喫煙の状況

周囲の喫煙状況を尋ねたところ、「友達・先輩はいるが、誰も吸っていない」が59.5%と最も多く、次いで「タバコを吸う友達・先輩がいる」29.9%、「友達や先輩はいない」10.6%であり、約30%の生徒の周りに喫

煙する友人や先輩がいるという結果となった。

### (3) 喫煙状況

現在および今までの喫煙状況を尋ねたところ、「今までに吸ったことがない」が78.9%と最も多く、次いで「吸ったことはあるが今は吸っていない」18.8%、「習慣的に吸っている」1.4%、「時々吸っている」1.0%であった。

### (4) タバコの害に対する認識

#### ① タバコの害に対する認識

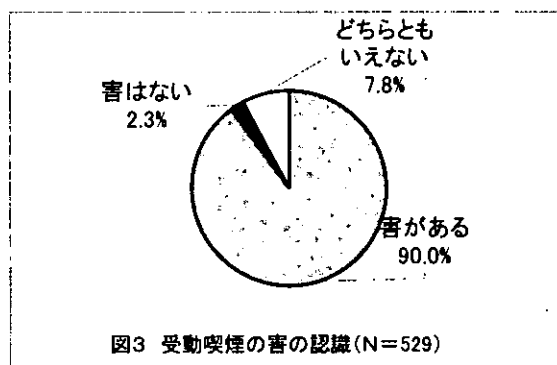
タバコに害があると思うか尋ねたところ、「害があると思う」と回答した生徒が88.3%と最も多く、次いで「わからない」5.5%、「多少はあるがたいしたことはない」5.3%、「害があるとは思わない」0.9%となった。

#### ② タバコの害についての知識

①で「害があると思う」と回答した生徒にタバコを吸うと害になると思うものを選んでもらったところ(複数回答可)、「肺がん」は97.4%と高かったが、「依存性がある」44.3%、「未熟児」29.5%、「皮膚の老化」29.1%、「胃がん」28.6%などそれ以外はすべて50%以下であった。

#### ③ 受動喫煙の害

受動喫煙は害があると思うか尋ねたところ、「害がある」が90.0%と最も多く、次いで「どちらとも言えない」7.8%、「害はない」2.3%であった(図3)。



## III 高校生

### 1 日常生活

#### (1) 家族との会話

家族との会話について尋ねたところ、「よく話をする」と回答した生徒が63.6%と最も多く、次いで「たまに話をする」29.0%、「ほとんどしない」6.6%、「全くしない」0.8%であった(表11)。

#### (2) 自己肯定

「自分には良いところがあると思うか」と尋ねたところ、「どちらとも言えない」と回答した生徒が37.7%と最も多く、次いで「どちらかといえばそう思う」26.0%、「そう思う」18.9%、「そう思わない」9.2%、「あまりそう思わない」8.2%であり、約15%の生徒が自分を否定的に捉えていた(表12)。

表 12 自分に良いところがあると思うか(N=904)

	度数	%
そう思う	171	18.9
どちらかといえばそう思う	235	26
どちらとも言えない	341	37.7
あまりそうは思わない	74	8.2
そう思う思わない	83	9.2

(3)相談できる友人の有無

なんでも相談できる友人の有無を尋ねたところ、83.1%以上の生徒が相談できる友人が誰かしらいると回答し、「どちらもない」と回答した生徒は 16.9%であった。内訳としては「動性の友達はある」と回答した生徒が 52.3%と最も多かった(表13)。

表 13 何でも相談できる友達がいるか(N=900)

	度数	%
同性の友達はある	471	52.3
異性の友達はある	20	2.2
同性も異性もある	257	28.6

2 性に関する調査

(1) 性に関する知識

性に関する知識を尋ねたところ、「エイズの増加」「10 台の性感染症の増加」「コンドームはエイズの予防に有効」という質問の正解率は 80%近かった。しかし、「県内での中絶の増加」「HIVは蚊から感染する」「STDに罹患しているとHIVに感染しやすくなる」など 19 項目中 12 項目については、50%を下回った。

(2)異性との交際状況

異性との交際状況について尋ねたところ、「以前はいたが現在はいない」が 38.7%と最も多かった。また、「現在付き合っている」は 24.2%であった(表14)。

表 14 交際状況(N=883)

	度数	%
付き合ったことはない	327	37
以前はいたが、現在はいない	342	38.7
現在付き合っている人がいる	214	24.2

(3)高校生のセックス認容度

高校生がセックスすることについてどう思うか尋ねたところ、「かまわない」が 48.7%と最も多く、次いで「わからない」18.5%、「どちらかと言えばかまわない」18.3%、「どちらかと言えばよくない」10.5%、「良くない」4.0%であり 70%弱の高校生は高校生がセックスすることについて肯定的であった(図4)。

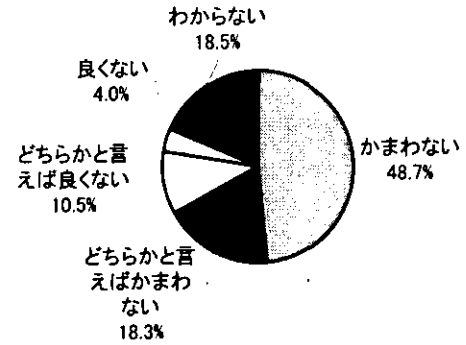


図4 高校生のセックス認容度(N=816)

3 タバコの調査

(1) 喫煙経験の有無

喫煙経験を尋ねたところ、「ある」45.6%、「ない」54.4%であった。

(2)初喫煙の年齢

(1)「ある」と回答した生徒に初めて喫煙した年齢を尋ねたところ、12~16 歳が 85%以上を占めた(図5)。

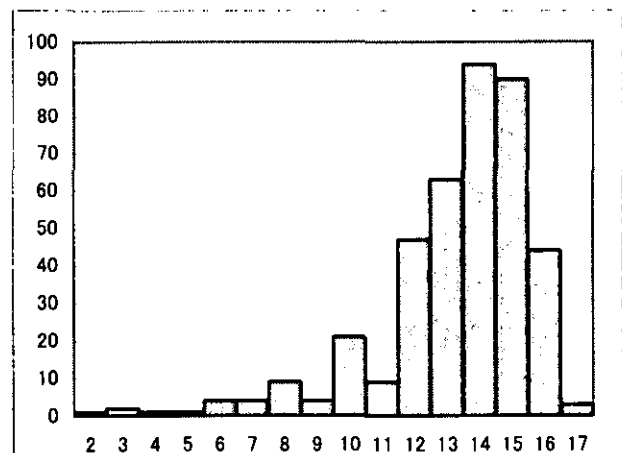
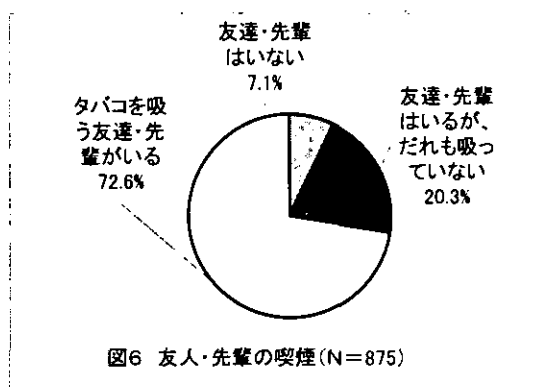


図5 初喫煙の年齢(N=397)

(2)周囲の喫煙状況

友人や先輩にタバコを吸う人はいるか尋ねたところ、「タバコを吸う友達・先輩がいる」と回答した生徒は 70%を越えた(図6)。



(3)

### 喫煙状況

喫煙経験の有無に関わらず、全生徒に喫煙状況を尋ねたところ、「今までに吸ったことがない」が 51.8%と最も多く、ついで「吸ったことがあるが今は吸っていない」23.4%、「習慣的に吸っている」18.2%、「ときどき吸っている」6.5%であり、約 25%の生徒が現在喫煙習慣があるという結果となった(表15)。

表15 喫煙状況 (N=888)

	度数	%
今までに吸ったことがない	460	51.8
吸ったことはあるが今は吸ってない	208	23.4
ときどき吸っている	58	6.5
習慣的に吸っている	162	18.2

### (4) 喫煙の害についての認識および知識

#### ① タバコの害に対する認識

タバコに害があると思うかと尋ねたところ、「害があると思う」と回答した生徒は 86.5%と最も多かった(表16)。

表16 喫煙の体への害 (N=884)

	度数	%
害があるとは思わない	14	1.6
多少はあるがたいしたことはない	61	6.9
害があると思う	765	86.5
わからない	44	5

#### ② タバコの害についての知識

①で「害があると思う」と回答した生徒にタバコを吸うと害になると思うものを選んでもらったところ(複数回答可)、「肺がん」についてはほぼ 100%で最も多く、次いで「依存性」が約 70%であったが、それ以外のすべての項目については、全て 50%以下であった。

#### ③ 受動喫煙の害について

受動喫煙は害があると思うかと尋ねたところ、「害がある」と回答した生徒は 95%を越えた(表17)。

表 17 受動喫煙の害 (N=888)

	度数	%
害がある	851	95.8
害はない	14	1.6
わからない	23	2.6

## IV 保護者

### 1 性に関する調査

#### (1) 性教育に関する考え

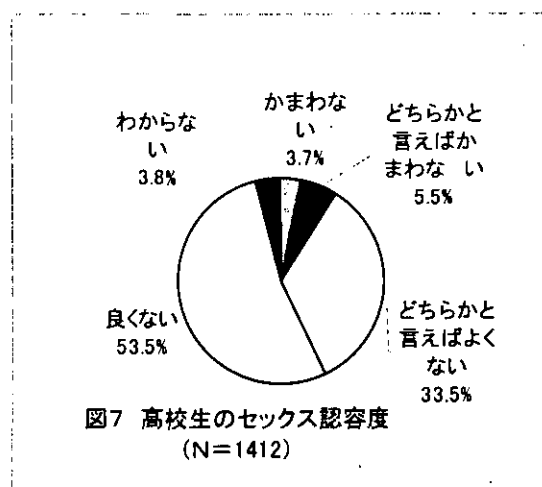
性教育に関する事柄をどこで教えるべきか尋ねたところ、「自分の誕生や存在の喜び」という項目以外はいずれの項目も「両方」との回答が 60%以上であった。中でも、「生命の大切さ」「男女仲良くする」は 80%以上の保護者が両方で教えるべきと回答した。また、「生命誕生のしくみ」「男女の体のしくみ」「性器の大切さ」「避妊方法」「エイズ・性感染症」の項目については、20%以上の保護者が「学校」と回答した。また、「家事等家庭での役割分担」「家族の愛情と協力」という項目については、「家庭」との回答が最も多くいずれも 60%台であった。

#### (2) 性に関する知識

性に関する知識を尋ねたところ、「エイズの増加」「10代の性感染症の増加」「クラミジアは性行為で感染する」「コンドームは性感染症やエイズの予防に有効」「安全日はコンドームなしでも妊娠せず」などの項目の正解率は約 80%であった。しかし、「県内での中絶数の増加」「STDに感染しているHIVに感染しやすくなる」「STDに感染していると子宮がんになりやすい」「エイズは感染後数日の検査でわかる」という項目の正解率は 20~30%台と低かった。

#### (3) 高校生のセックス認容度

高校生がセックスすることについてどう思うか尋ねたところ、「よくない」が 53.5%と最も多く、次いで「どちらかと言えばよくない」33.5%、「どちらかと言えばかまわない」5.5%、「わからない」3.8%、「かまわない」3.7%であり、90%近くの保護者は高校生がセックスをすることについて否定的であった(図7)。



## 2 タバコの調査

### (1) 喫煙経験の有無

喫煙経験を尋ねたところ、「ある」58.7%、「ない」41.3%であった。

### (2) 初喫煙の年齢

(1)で「ある」と回答した保護者に、初めて喫煙した年齢を尋ねたところ、12歳から18歳が90%近く占めた(図8)。

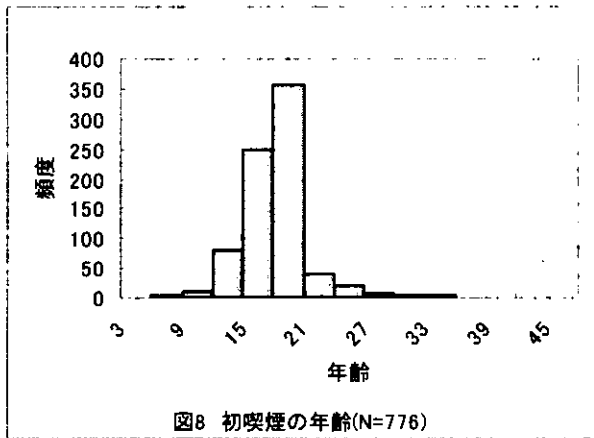


図8 初喫煙の年齢(N=776)

### (3) 現在の様子

(1)で「ある」と回答した保護者に現在の様子を尋ねたところ、50%以上の保護者が「習慣的に吸っている」と回答した(表18)。

表18 現在の喫煙状況(N=780)

	度数	%
時々吸っている	50	6.4
吸ったことはあるが今は吸っていない	276	7
習慣的に吸っている	411	52
その他	43	5.5

### (4) 喫煙のきっかけ

#### ① 喫煙のきっかけ

(1)で「ある」と回答した保護者に喫煙のきっかけを尋ねたところ(複数回答可)、「周囲の喫煙」と「勧められた」がそれぞれ、58.8%、28.9%と多く、90%近くが周囲の喫煙がきっかけとなっていた(図9)。

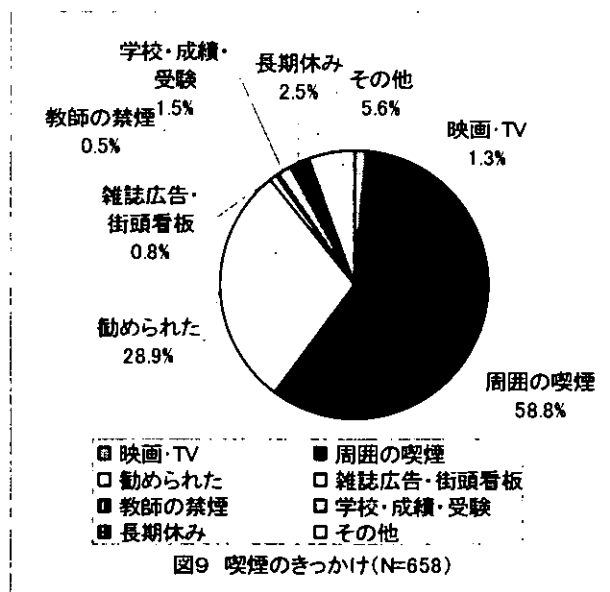


図9 喫煙のきっかけ(N=658)

### ② 誰の喫煙がきっかけだったか

①で「周囲の喫煙」と回答した保護者に、誰の喫煙がきっかけだったか尋ねたところ(複数回答可)、「父・母」、「祖父母」、「兄弟」などの家庭の人がきっかけだったとの回答が559と最も多かった。

しかし、「友人」477、「先輩」133と友達や先輩がきっかけになっている人も多かった(図10)。

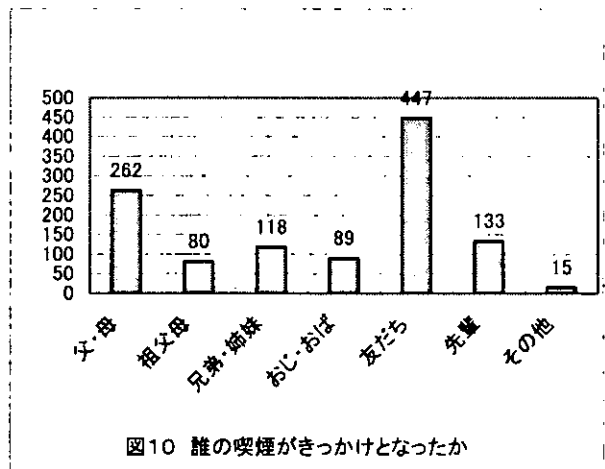


図10 誰の喫煙がきっかけとなったか

### ③ 誰に勧められたか

①で「勧められた」と回答した保護者に、誰に勧められたか尋ねたところ(複数回答可)、「友達」が76.8%と最も多く、次いで「先輩」16.8%、「家族」3.9%、「その他」2.5%であった(図11)。

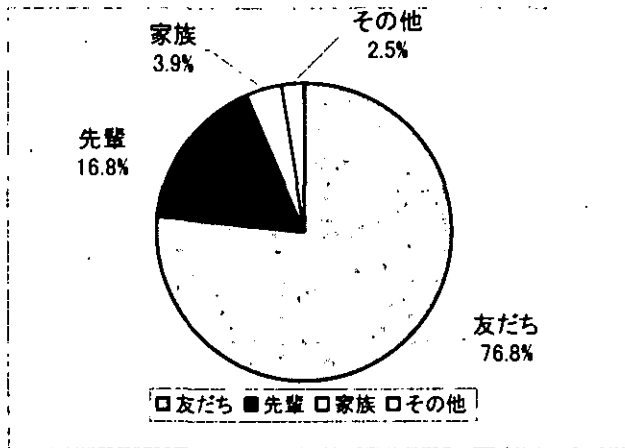


図 11 誰に勧められたか

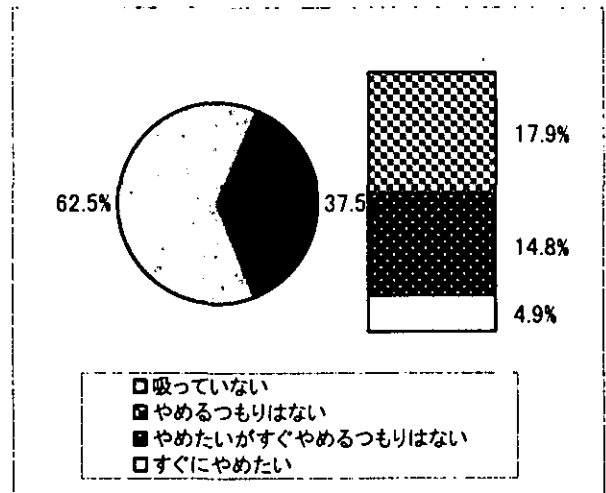


図 12 卒煙の意思 (N=1247)

(5) 喫煙の害についての認識および知識

① タバコの害に対する認識

タバコに害があると思うか尋ねたところ、「害があると思う」が 96.3%と最も多かった(表 19)。

② タバコの害についての知識

①で「タバコの害がある」と回答した保護者にタバコを吸うと害になるものを選んでもらったところ、「肺がん」についてはほぼ 100%と最も多く、次いで「未熟児」「依存性」が約 70%、「喉頭がん」「心筋梗塞」「流産」「早産」「皮膚の老化促進」が約 50%、「歯周病」が約 30%、「胃がん」約 20%であった。なお、「子宮がん」「膀胱がん」については 10%以下であった。

③ 受動喫煙の害について

受動喫煙は害があると思うか尋ねたところ、「害がある」と回答した保護者が 96.5%と最も多かった(表 20)。

表 20 受動喫煙の害(N=1328)

	度数	%
害がある	1282	96.5
害はない	12	0.9
わからない	34	2.6

(6) 卒煙の意思

タバコをやめる気があるか尋ねたところ、「吸っていない」との回答が 62.5%と最も多かった。吸っている人(37.5%)では、「やめるつもりはない」が 17.9%、「止めたいがすぐやめるつもりはない」14.8%、「すぐにやめたい」4.9%と止めたい人と止めたくない人が半々だった(図 12)。

V 関係機関

1 保健センター(5市町)

表 19 喫煙の害(N= 1326)

	度数	%
害があるとは思わない	6	0.5
多少はあるがたいしたことはない	37	2.8
害があると思う	1277	96.3
わからない	6	0.5

(1) 実施状況

① 実施の有無

H13~15 度(12 月)に思春期保健対策として「喫煙」や「性」に関する事業の実施状況を尋ねたところ、「実施した」3ヶ所、「実施していない」2ヶ所であった。

② 実施内容と目的

①で実施していると回答した3市町に実施目的と内容を尋ねたところ、「不安定な思春期を上手に乗り切る」「自尊心やお互いを思いやれる心を育てる」など目的とし、「出産」、「思春期の心と体の変化」、「命の大切さ」についての講演を学校で実施しているとの回答があった。

③ 実施しての問題点・課題

①で実施していると回答した3市町に、実施して感じた問題点・課題を尋ねたところ、

- ・対象集団が多く(1回に 200 人以上)一方的
- ・学校と地域での共通認識が不十分
- ・実施の効果が不明(評価ができていない)
- ・単発な依頼のため継続性がない
- ・保護者にも参加してほしい

などの回答があった。

(2) 思春期保健事業を実施していく上での課題

思春期保健事業を実施していく上での課題について尋ねたところ、・学校との連携をとる機会がなかなかない

・学校が保健センターにどのような役割を期待しているのかわからない

・乳幼児健診の充実  
などの回答があった。

(3)保健所に望むこと

思春期保健事業を実施していく上で保健所に望むことを尋ねたところ、

- ・教材の貸し出し
- ・関係機関との連携・ネットワークの確立
- ・実態調査
- ・思春期保健の研修会の開催
- ・保健所と市町との連携強化

などの回答があった。

(4)その他の意見

その他「乳幼児健康診査やマタニティーセミナー、住民検診等、保健センターで実施している日々の業務の中で、思春期保健につながっているという視点が必要」という意見があった。

2 教育委員会(5市町)

(1)実施状況

市町の小中学校における「性教育」「喫煙防止教育」の実施状況を尋ねたところ、学校保健計画に基づき外部講師による講演や保健学習の中で指導しているとの回答が多かった。

(2)思春期保健事業を実施していく上での課題

思春期保健事業を実施していく上での課題について尋ねたところ、

- ・地域の連携
- ・小学校、中学校、高等学校と系統立てた指導
- ・保護者への啓発

との回答があった。

(3)保健所に望むこと

思春期保健事業を実施していく上で保健所に望むことを尋ねたところ、

- ・資料・統計資料の提供
- ・外部講師の紹介
- ・保健所が窓口となり、思春期保健全般に対する問題に取り組んでほしい

との回答があった。

3 学校

(1)実施内容

①実施の有無

(小学校)

43校中39校から回答が得られた。

以下の項目についての実施状況を尋ねたところ、「生命の誕生のしくみ」「自分の誕生や存在の喜び」「生命の大切さ」「男女の体のちがい」「エイズ」「タバコの害」「相手の人格の尊重」については大部分の学校が実施しているが、「性行動の意思決定」「性被害にあわないために」については実施している学校は半分以下であった。なお、実施していない理由として

は、時間不足、資料不足のほかに、小学生では早い(必要ない)と思うという意見が見られた(表21)。

表21 実施内容(小学校)

項目	実施	実施していない理由(複数回答可)		
		時間不足	資料不足	その他
生命誕生のしくみ	36	2		
自分の誕生や存在の喜び	35	2		
生命の大切さ	35	1		
男女の体の違い	39			
性器の大切さ	31	4	3	
エイズに関すること	38			
性行動の意思決定	8	5	11	4
性被害にあわないために	16	6	9	3
タバコの害について	39			
相手の人格を尊重しよう	36	1	1	

(中学校)

19校中17校から回答が得られた。

「マスターベーション」「セックス」「避妊法」「人口妊娠中絶」については実施している学校は半分以下であった。なお、実施していない理由としては、時間不足、資料不足のほかに、扱いにくい、指導が必要か疑問、指導要領にないなどがあった(表22)。

表22 実施内容(中学校)

項目	実施	実施していない理由		
		時間不足	資料不足	その他
思春期の心と体	17			
生命誕生のしくみ	16	1		
自分の誕生や存在の喜び	16	1		
生命の大切さ	16	1		
男女の体の違い	17			
性器の大切さ	12	1	1	
マスターベーション	7	4	6	1
性交(セックス)	9	4	5	
エイズの感染経路・予防法	16	1		
エイズ以外の性感染症	15	2		

避妊方法	5	4	5	7
人工妊娠中絶	7	5	3	2
性行動の意思決定	11	2	3	
性被害にあわないために	15	2		
タバコの害	17			
相手の人格を尊重する	16	1		
男女平等・差別	15	2		

(高等学校)

9校中 8校から回答が得られた。

高等学校においては、全ての項目についてほぼ全校が実施しているとの回答があった(表23)。

表23 実施内容(高等学校)

項目	実施している	実施していない理由		
		時間不足	資料不足	その他
思春期の心と体	8			
生命誕生のしくみ	8			
自分の誕生や存在の喜び	6	1		
生命の大切さ	7			
男女の体の違い	8			
性器の大切さ	7			
マスターベーション	8			
性交(セックス)	7		1	
エイズの感染経路・予防法	8			
エイズ以外の性感染症	7			
避妊方法	8			
人工妊娠中絶	8			
性行動の意思決定	6		1	
性被害にあわないために	6			
タバコの害について	8			
相手の人格を尊重する	6	1		
男女平等・差別について	5	1		

## ②実施しての問題点・課題

実施している上で感じる問題点・課題を尋ねたところ、

- ・指導教材が不足している
- ・専門的知識の不足
- ・個人差が大きい

- ・どこまで指導すればよいかわからない
- ・保護者も含めた地域との連携
- ・性情報が氾濫していて、子どもたちが誤った情報を身につけている
- ・時間が不足し、指導内容に限りがある
- ・生徒にいくら喫煙防止教育をしても、教員が生徒の見えるところで吸っているので効果が薄い
- ・職員の啓発が必要
- ・外部講師による講演の事前・事後教育を実施する時間の確保が難しい

などの意見があった。

## (3)保健所に望むこと

思春期保健事業を実施していく上で保健所に望むことを尋ねたところ、

- ・講演の実施
  - ・資料・統計資料の提供
  - ・外部講師の紹介
  - ・資料・教材の貸し出し
  - ・関係機関と連携および役割分担の明確化
  - ・継続的な対策の実施
- との回答があった。

## 4 医療機関

医療機関に思春期保健対策への意見・要望を尋ねたところ

- ・STDや望まない妊娠の急増に危機を感じる
  - ・学校は「寝た子を起こす」という批判をするのではなく、もっと実践的な教育を実施すべき
  - ・行政は、セックス産業に対し、もっと厳しい規制をするべき
  - ・実態調査が必要
  - ・管内の医療機関との連携強化
- などの回答があった。

## D. 考察

性行動や喫煙、非行などと関連があるとされている自己の肯定感については、小学生の約 50%は自分を肯定的に捉えているものの中学生では 30%、高校生では 40%であり、特に中学生においては自分を否定的に捉えている生徒の方が多く、自己肯定感を高めていく教育の必要性が感じられる。また、思春期という悩みが多い時期にも関わらず、「相談できる友達がいない」という回答が 15%~30%であり、何かあった時に相談できずに一人で悩んでしまわないように、相談窓口などの案内をより充実していく必要性を感じた。

生徒の性に関する知識は、約半分の項目で正解率が50%を下回った。特に、生徒自身が性感染症や望まない妊娠から身を守るための具体的な知識については正解率が低く、これらの原因として学校や学年によっては、実施できていないことも影響していると考えられる。しかし、近年の 10 代の性感染症や人工妊娠中絶の増加を考えれば、これらを予防するために



必要な具体的な知識を生徒たちに伝える必要性は極めて高く、今後の教育のあり方の検討が必要だと思われる。さらに、初交経験の低年齢化を考えれば、これらはもっと早期に実施しなければならない。実際、今回のアンケートでも、70%の高校生は高校生がセックスをすることについて肯定的であるし、中学生でも交際相手であればセックスに応じると回答した生徒が10%を超えた。やはり、初めてのセックスでも予防しなければ望まない妊娠や性感染症に感染する可能性がある以上、中学生や高校生に予防できる知識や技術をきちんと伝える必要があると考える。

また、保護者へのアンケートで、性教育に対する考えを尋ねたところ、ほぼ全ての項目で学校と家庭の両方で実施するべきとの回答が最も多かった。しかし、「避妊方法」など比較的学校側で「寝た子を起こす」とためらいがちな項目では、「学校」で実施するべきという回答が他の項目より多かった。これは、保護者自身がそのような教育を受けていないこともあり、指導に不安を感じている点も大きく影響していると考えられる。実際、保護者にも性に関する知識を尋ねたが、「県内での中絶数の増加」「STDに感染しているとHIVに感染しやすくなる」「STDに感染していると子宮がんになりやすい」「エイズは感染後数日の検査でわかる」など自分の身を守るために必要な具体的な知識の正解率は20～30%台と低かった。

タバコについては、小学校、中学校、高等学校のいずれにおいてもほぼ全校が「実施している」との回答があった。そのため、「タバコは害がある」という認識は、90%以上であった。しかし、その具体的項目を尋ねると「肺がん」が90%程度であったが、他の多くの項目については50%以下と低かった。特に小学生については、受動喫煙の害の認識もやや低く、「害がある」との回答は80%程度であった。

タバコは健康的側面はもちろん、思春期においては、非行の入り口ともされている。このような観点からも、タバコについての正しい情報をきちんと伝える喫煙防止教育を繰り返し、実施していく必要があると考える。また、生徒たちに周囲の喫煙状況を尋ねたところ、「友達や先輩に吸っている人がいる」との回答が中学生では約30%、高校生では70%を超え、さらに小学生においては、70%以上の生徒が家族に吸う人がいると回答していた。このように、未成年者の周りにも喫煙者が多く、生徒たちはいつ吸い始めても不思議ではない環境の中にいることがわかった。このことより、未成年の喫煙防止のためには、単に知識を伝えるのみならず、喫煙の誘いを断る技術を身につける教育を実施すること、保護者や教員など周りの大人への正しい知識の普及・啓発をし、子供たちが喫煙に手を出しにくい環境を整えていくことが必要だと考えられる。

これらを実施していくためには、小学校・中学校・高等学校と系統立てた教育や保護者への啓発が必要であり、そのためには、学校・家庭・地域・医療機関の

連携・ネットワークの確立と役割分担の明確化が求められる。今後、このアンケート結果を地域に還元していくとともに、このようなネットワークの構築に努めたい。

#### E. 結論

①多くの若年者が同年代の子がセックスすることに肯定的であるが、性感染症や妊娠を予防するために必要な具体的な知識については正解率が低く、今後の教育のあり方(内容と実施時期)の検討が必要である。

②保護者自身も自分の身を守るために必要な知識の一部は正解率は低いこと、学校現場では「寝た子を起こす」という意見が根強く具体的な指導が困難になっていることより、生徒たちのみならず、保護者や教員への啓発も必要である。

② 多くの未成年者の周りには、喫煙者がおり、タバコに手をだしやすい環境となっている。

③未成年の喫煙防止のためには、周りの大人への正しい知識の普及・啓発が不可欠である。

④関係機関の連携、ネットワークの確立、役割分担の明確化をいかにするかが今後の課題である。

#### F. 発表論文 なし

平成15年度

厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)分担研究報告書  
思春期の保健対策の強化及び健康教育の推進に関する研究

2. 思春期保健対策展開に関わる学校保健制度に関する研究

(1) 児童生徒のエイズ知識、態度、行動に関する研究

分担研究者	大澤清二 大妻女子大学人間生活科学研究所 教授
研究協力者	下田敦子 大妻女子大学人間生活科学研究所 助手
	軽部光男 大妻女子大学人間生活科学研究所
	和気則江 琉球大学医学部保健学科 助手
	高倉実 琉球大学医学部保健学科 助教授

研究要旨

14年度に引き続き思春期保健の課題としてエイズ教育に関する調査をおこなった。国内における地域比較の立場から主として、埼玉と沖縄の児童生徒・保護者約20,000人を対象としたエイズ知識、態度、行動に関する調査を行った。これらの結果として、別添資料2種類が得られた。エイズ教育の学習の順次性について項目反応理論によって分析した。児童生徒、保護者においてエイズ患者・HIV陽性者に対する差別意識は未だ根強く起こっている。また保護者の学校教育に対する期待が大きいことが確認された。

A. 研究目的

この研究では主としていかなる学習単元、項目の順序でエイズ学習を進めていくべきかをその難易度と識別度という観点から明らかにしようとしている。このためにテスト理論とくに項目反応理論を用いて接近した。

B. 研究方法

埼玉県、沖縄県の小学生、中学生、高校生、保護者約20000人を対象としてエイズ知識、態度、行動に関する調査を行った。

実施時期は平成14年11月から12月および15年6月である。行方にあつたては現場の教育委員会と数度にわたって入念な打ち合わせを行い、協力体制を形成した。項目は従来一般に採用されているエイズに関する知識、態度、行動50項目と関連する24項目などで

あつた。調査は教育委員会経由で各学校に調査用紙を配布しそこで監督者マニュアルにしたがつて回答を求めた。また保護者については児童生徒が家庭に持ち帰って記入してもらった。

C. 研究結果と考察

まず、基礎的な検討としてエイズ知識項目特性を項目反応理論によって推定した。実際に推定されたのは識別力と困難度であった。識別力と困難度はそれぞれ項目の特性を規定する母数である。これらによって、エイズ知識を今後検討してゆくときのそれぞれの項目の難しさとその項目の持つ感受性とも言うべき識別能力を客観的な尺度を構成した。つまり、この尺度によって、エイズをどれくらい理解しているかを真に測ることができる。これを出発点として、今後教育実験や調査をするときの手が

かりを得ることができるようになった。

また、本研究ではそのエイズ知識項目の特徴を用いて学習指導順序について論じた。具体的な方法としては、まず困難度と識別力によってカテゴリを4つに別け、各カテゴリに入っている項目をそれぞれ抜き出した。そこから、カテゴリにおいて特徴的な項目を見つけだした。そして、特徴的な項目から生徒のエイズ知識の理解構造を考えた。

その結果、「疲労しているとエイズにうつりやすい。」、「HIV を多く含む体液は、血液である。」、「男女間の性行為でエイズがうつることがある。」などの項目の難易度が低く、エイズ知識としては、大多数の人が理解できている項目ということができる。一方、「蚊から HIV に感染することがある。」、「ペットや他の動物から感染しない。」、「早く処置しても、エイズを治療することはできない。」、「エイズには、有効なワクチンがある。」などの人間以外の感染経路に関する項目と HIV の治療に関する項目は、難易度が高いことが示された。しかし、「男女間の性行為でエイズがうつることがある。」、「握

手で HIV に感染することがある。」、「エイズ患者の血液が自分の傷口につくとうつることがある。」など、人間同士の感染経路に関しては難易度が低く、生徒の理解度が高いことが示された。

エイズ教育の学習の順次性に関して次のような提案した。まず、感染経路を教育する場合、人間同士の感染経路に関して教える。そして、その後で特別な状況の中で感染がおこるかを教える。そのときに動物からの感染経路がどうなのかも教える。その後に、エイズの感染とは何か？ということをして教えて、その上でエイズの治療がどのように行われるのかを教える方が、理解度を高めるには効果的であることがわかった。

D. 健康危険情報 なし

E. 発表

F. 知的所有権 なし

平成13・14・15年度

厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究事業)

「思春期の保健対策の強化及び健康教育の推進に関する研究」

「埼玉県加須市における児童・生徒の  
エイズ知識・態度・行動に関する研究」

大澤 清二 大妻女子大学  
下田 敦子 大妻女子大学  
大久保 智哉 東京工業大学